

ムラの人たちから 頼られる存在に

農村全体でマチの人を受け入れる、農泊という形のグリーン・ツーリズムで全国的に有名な安心院町。今回の研修の場は、この安心院町の活動を牽引する事務局だ。すでに様々な活動を展開しているところだけに、やるべきことが山積みだ。どこまで頑張れるか、どう個性を発揮できるか、が問われた研修だった。

グリーン・ツーリズムのメッカとして 全国でも有名な安心院町で学ぶ

安心院町は周防灘と豊後水道に挟まれた国東半島の付け根あたりにある。2005年に宇佐市と合併し、宇佐市安心院町となった。温泉で有名な由布院からも近い、周囲を山々に囲まれた盆地である。この安心院盆地の景色は、かつて司馬遼太郎が訪れ、日本一と絶賛したことでも知られる。地域がすでに高地で、周りの山々はそれほど高く見えないため圧迫感はなく、むしろ盆地の平地が広々と感じられる美しい農村だ。ここでは、時の流れさえもゆったりと感じられる。山の幸あふれる田舎料理も、伝統の調理法と素材の良さで頬が落ちるほど美味しい。



研修生の入交律歌さんと農村民泊「桃源郷こびら」の江藤憲子さん

・プロジェクトの概要・

[受入組織]
NPO法人 安心院町グリーンツーリズム研究会



大分県宇佐市安心院町
(おおいたけんうさしあじむまち)

研修生 入交 律歌さん(25歳)
(いりまじり りか)

実施期間 2009年9月28日～
2010年3月27日

安心院町は、由布院の北側に位置する盆地にある。ブドウの産地でもあり、美しい農村風景が残っている。グリーン・ツーリズムの先進地として全国に知られ、農村全体を楽しんでほしいという願いを込めて、農家民宿を「農村民泊」と呼んでいる。



農村民泊

農林漁業作業や宿主の生業を体験する機会を提供し、収穫した農水産物を宿泊者と一緒に調理して味わう宿泊施設のこと。地域により、農漁家が営む「農家民宿・漁師民宿」や「農林漁家体験民宿」、農家以外も提供する「農村民泊」など、呼び名も様々である。個人で経営している宿が大半で、その経営方法も多種多様だ。ここでの生業は、個である宿の安定した経営、宿同士の関係作り、地域全体の繋がり作りがカギとなる。

安心院町は小さな盆地のムラだが、その名を「グリーン・ツーリズムのメッカ(発祥地)」として知られている。1992年、ぶどう農家で、現在、NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会の会長、宮田静一さんを中心に始まったグリーン・ツーリズム(当初の名称はアグリ・ツーリズム)は、当初、地域の人に新興宗教か何かのように誤解されたそう。地域の人々にとっては、まったく聞いたことのない言葉だから、仕方がなかったかもしれない。それが今や、先進地域として全国、そして海外からも注目を集め、年間4500人あまりの旅行者が訪れるようになった。体験学習や教育・修学旅行の生徒も多い。なお、安心院町では、「農村全体を楽しんでもらいたい」という想いを込めて、「農家民宿」ではなく、「農村民泊」と呼んでいる。平成20年度の「九州 ムラの生業プロジェクト」では、研修生たちが、農泊を体験してその魅力を学んだ。新規に農村民泊を始められる農家さん宅の調査を行ったのだ。現在、それらの農家さんはメンバーとして農泊を提供している。

安心院町は、すでに全村をあげたグリーン・ツーリズムで成果を出し、モデル地域として注目を集めている。今後のさらなる発展を目指している地域で、今回の研修生は何を学んだのか。農村民泊を提供している農家の1つ、江藤さんのお宅で、研修生の入交さんに話を聞いた。